

ことさんとしらさぎ

学習した日

月 日



昔、ある農家に、ことさんというむすめさんがいました。その働きぶりと心のやさしさは、村の中でも大変ひょうばんでした。ことさんの家のうら山には、広い竹林がありました。春になると、南の方から白くて美しい鳥がとんで来て、その竹林に巣を作ります。「しらさぎ」という鳥です。

ある夏のあらしの後のことでした。ことさんがうら山に行ってみると、たくさんのしらさぎの赤ちゃんたちが、巣から落ちて死んでしまっていました。

(かわいそうに。)

あたりを見回してみると、たった一羽、かすかに動いているしらさぎの赤ちゃんがいるのに気がつきました。どうやら巣から落ちて足をけがしてしまったようです。ことさんは、

その子さぎをそっと両手でだきあげて、

(きつとなおしてあげるわ。わたしが。)

とおおずりをしました。

それから毎日毎日、暑い日でもことさんは、畑仕事のあと、子さぎのエサとなるどじょうやたにしを田んぼからとってきて、その子さぎに食べさせました。子さぎは少しずつよくなり、立ち上がって歩けるようになりました。しかし、なかなか飛べるようにはなりません。

やがて、ことさんは美しいむすめに成長し、十七さいでおよめにいくことが決まりました。ただ、ことさんは、まだ飛ぶことのできない子さぎのことが気がかりではありません。(わたしが、もし、この家を出て行ってしまったら、あの子さぎは……。できることならいっしょに連れて行きたい。)



ところが、そんなことさんのもとへ、次第にこんなうわさが聞こえ始めました。

「鳥といっしょによめにいくなんて、聞いたことがない。」

「よめ入りの話だって、なくなるかもしれないぞ。」

ことさんは、子さぎを見つめながら、考えこんでしまいました。

いよいよ、よめ入りの日になり、ことさんのうでの中には、ある大きな白いものがだきかかえられていました。あの子さぎです。まっ白の花よめいしように、白い子さぎをだいて歩くことさんのすがたは、大変美しいものでした。村の人たちも思わず見られてしまい、だれ一人としてわる口を言う人はいませんでした。

ことさんのおかげで、子さぎはすっかり元気になりました。畑仕事をする時も、休けいをする時も、子さぎは、ことさんの後ろについておともをしました。そのすがたは、まるで家族のようでした。

やがて、夏もすぎ、秋になりました。秋空をしらさぎのむれが少しずつ南の方へ帰りはじめます。そんなしらさぎのむれを見つめながら、ことさんは子さぎのこれからのことを考えるようになりました。

(いつまでもいっしょにいたい。だけど……。)

今までの楽しかった日々を思い返すと、ことさんはむねが
いっばいになりました。どれくらい時間がたったでしょうか。
ことさんは、子さぎに目をやり、やさしく語りかけました。

「さあ、お行き。」

子さぎは、おそろおそろ羽を広げ、ゆっくり、ゆっくりと
しらさぎのむれに向かっむて飛んでいきました。子さぎを見送
ることさんのえがおにはなみだがあふれていました。

次の年の春、ことさんの家にしらさぎのむれがやってきま
した。そのよく年も、それからことさんの家には、いつまで
もいつまでも、しらさぎのむれがおとずれたのでした。



● ことさんはどうして大事にして
いたしらさぎを見送ったので
しょうか。